古代、中世における「人魂」の語義――「流星」との関係性から

清水　咲希

一、はじめに

現在、一般的に、人魂[1]というと人から遊離した魂が墓場などに漂っている様子を想像する。それでは、古くに「人魂」と呼ばれていたものは現在と同じものだったのだろうか。当時の「人魂」がいかなるものだったかを探るために、その語義をまず確認していきたい。

『角川古語大辞典』、『日本国語大辞典』（第二版）では、「人魂」という語には大きく分けて①人から遊離した魂、②流星の俗称、③歌舞伎の小道具の三つの意味があったとされている[2]。①の意味は現在における人魂と同じ意味であるが、②の意味は現在の認識とは異なる。この②の意味が古代、中世特有の認識を知る手がかりとなりそうである。

そもそも流星と「人魂」は結びつくものなのだろうか。

イ、未時星出自空中。南東歴行。遂殞于地。其声如雷落乎。尾長五六尺許。観者奇怪。謂之人魂（『日本紀略』昌泰二年二月一日[3]）

右は『角川古語大辞典』及び『日本国語大辞典』（第二版）の流星の俗称を指す「人魂」の用例として掲げられている記述である。こちらは、「星、空中より出づ」、すなわち、星が空から出てくるという記述があるため、流星を指しているものとみられる。この他にも、「流星」という語と「人魂」という語が併記されている例はいくつかみられ[4]、「人魂」と「流星」が密接な関係にあったことは明らかである。

また『日葡辞書』[5]には、「誰かが間もなく死ぬにちがいないしるしとして、球のような形をして空中に現れる光物。」とあり、死後ではなく、死の前兆として出現すると

されていたようである。

なお、中国の文献には、「人魂」という語は見られず、漢語ではない。

「流星」と「人魂」の関係は具体的にどのようなものなのだろうか。先行研究を確認し、『角川古語大辞典』と『日本国語大辞典』の掲げる②の語義を掘り下げつつ、「人魂」と流星の関係について調べていく。そして、「人魂」の語義の観点から当時、「人魂」と呼ぶ時、どういったものをイメージしていたのかについて明らかにしていきたい。

二、「人魂」と流星についての従来の認識

それでは、先行研究の中では「人魂」と流星はどのように説明されているのだろうか。

増田繁夫氏「「たま」「たましひ」のイメージ――「人魂」「魂笆」「魂の緒」」（論集平安文学5『平安文学の想像力』勉誠出版、二〇〇〇年）はまず蛍を人の魂とみることが古くからあったことを説明する。次に、蛍に限らず、古くから夜に光り飛ぶものをみた人々はそれを人魂だと考えたことを指摘している。そして、その例として、流星を人魂とみた例、流星ではないその他の光り飛ぶものを人魂とみた例を挙げる。また、人魂をみる際には、人魂出現を予測させるような状況下にあったとしている。さらに、人魂の形に関して、それを知る手がかりとなるような例をいくつか挙げている。

増田氏の、夜に光り飛ぶものをみた人々はそれを「人魂」と考えたというこの指摘は適切であるといえる。この増田氏の指摘は遊離魂か流星かという視点からの指摘ではないが、これふまえると、『角川古語大辞典』、『日本国語大辞典』のように、遊離魂か流星かいずれか、というように分けるべきではなく、光る物一般に対して魂とみる考え方が当時存在しており、流星もまたその一つだったとみるべきだといえるのである。

ただし、増田氏の論にはいくつか問題点がある。まず「流星」と「人魂」とが併記されているもののみを流星とみていることが挙げられる。「流星」と併記されておらず、「人魂」とだけ書かれている例は、実体がどういうものか不明であるとし「人魂」の形態を知るための手掛かりとしてみているのである。また『角川古語大辞典』の中で流星の意の用例として掲げられている例[6]も流星ではなく、実体の明らかでない「人魂」としている。

次に臼井正氏の言及[7]について確認することとする。臼井氏は『更級日記』の「人魂」を流星だったのではないかとみている。

ロ、「この暁に、いみじく大きなる人だまのたちて、京ざまへなむ来ぬる」と語れど、供の人などのにこそはと思ふ。ゆゆしきさまに思ひだによらむやは。（『更級日記』[8]）

この『更級日記』の「人魂」には、従来、注釈において次のような説明がなされている。「人の魂が抜け出して飛ぶ火の玉。人の死ぬ前ぶれとして忌まれていた。」（日本古典文学全集[9]）、「人の死ぬ前、魂が体から抜け出し、青い火の玉となって飛ぶと考えられていた。鬼火。陰火。「人魂のさ青なる君がただひとり逢へりし雨夜の葉非左し思ほゆ」（『万葉集』巻一六、第五句は訓じがたい）。」（新潮日本古典集成[10]）とあり、これまでこの「人魂」は遊離魂として捉えられてきたことがわかる。また、「人魂」という語に対する注ではないが、「供の人などのにこそは」の注に「その人魂は供の人か、だれかのであろう（人が死ぬる（ママ）前、人魂が飛ぶという俗信があったものか）と思った。「こそはあらめと思ふ」の略。ただしここは「供の人などのにとこそは思へ」とあるべき所。」（日本古典文学大系）とあり、日本古典文学全集と同様、「人魂」が人の死の前に出現するものであることが記されている。なお、新日本古典文学大系の注には「人魂」に関する説明はない。

臼井氏はまず、『更級日記』と近い時代に流星を「人魂」といったことがあることを指摘する。次に、「人魂」の飛行する位置に着目し、「人魂」には低い位置を飛ぶもの（遊離魂）と高い位置を飛行するもの（流星）があるとしている。その上で、『更級日記』の「京ざまへなむ来ぬる」という表現は高い位置を飛んでいるようであると指摘する。そしてこの同時代に流星を「人魂」と呼んだ例があることと、高い位置を飛んでいるような表現であることの二点を根拠とし、『更級日記』における「人魂」は流星であるという可能性が高いと考えている。なお、臼井氏は「人魂」が人の死の前兆として出現することについては特に重視していない。

臼井氏の述べるように、『更級日記』における「人魂」が流星である可能性は高いと思われる。臼井氏の指摘は「人魂」か「流星」かいずれかという視点に立ったものではないが、臼井氏と増田氏の論をあわせて考えると、『角川古語大辞典』や『日本国語大辞典』の①の意味として扱われてきた「人魂」も、光る物一般に魂を見る認識に基づいたものであり、その多くは流星をみて遊離魂であると判断したものなのではないかと考えられる。

ただ、その根拠として飛ぶ高さのみを掲げるのは不十分だろう。「京ざまへなむ来ぬる」という記述からは飛んでいる高さを読み取るのは困難である。

このように、「人魂」についての見解はそれぞれ異なっており、曖昧である。そのため、これまで現在イメージする遊離魂と同じものとしてみられてきた他の「人魂」に関する記述も流星とみることができるかどうかについて検討する必要がある。それから、「人魂」の色や形態についてや、「流星」と記述せずに「人魂」としたことについても改めて確認するべきであろう。

三、流星を見て「人魂」と判断した可能性

それでは、流星をみて遊離魂であると判断した記述はどれくらいあるのだろうか。これまで現在と同じ遊離魂としてみられてきた記述や、これまで特に流星であるとの言及がされてこなかった記述についても検討していきたい。

まずは、動作の面から現在の認識で捉えると説明がつかない記述からみていきたい。

ハ、この度は姫宮にてはわたらせ給へども、法皇ことにもてなしまいらせて、五夜、七夜などことに侍しに、七夜の夜、事ども果てて、院の御方の常の御所にて御物語あるに、丑の時ばかりに、橘の御壺に、大風の吹折に荒き磯に浪の立つやうなる音、おびたゝしくするを、「何事ぞ。見よ」と仰せあり。見れば、頭はかいふといふ物のせいにて、次第に盃ほど、陶器程なる物の、青めに白きが、つゞきて十ばかりして、尾は細長にて、おびたゝしく光りて、飛びあがりくする。「あな悲し」とて逃げ入。廂に候公卿たち、「何か見騒ぐ。人魂なり」と言ふ。「大柳の下に、布海苔といふ物を溶きて、うち散らしたるやうなる物あり」などのゝしる。やがて御占あり。法皇の御方の御魂のよし奏し申。今宵より、やがて招魂の御祭り、泰山府君など祭らる。（『とはずがたり』巻一[11]）

この『とはずがたり』の「かいふ」は「かいご」で、卵ほどの大きさの意か。一説に「海賦」とも「匙」「土器」とも言う。」（新日本古典文学大系）、「「海賦」（又は「海部」）すなわち大波・海松・貝など海岸の風物を描いた文様か。また、「匙」の誤写で匙の類とも、「土器」（盃の類）の誤写とも言う」（新潮日本古典集成[12]）、「「海賦」か。海賦（海部）は海辺の様を表す文様。波に松や貝などを配する。手長や足長などを描くこともあるので、そのような怪しい物の意か。」（新編日本古典文学全集[13]）とされてい

る。「陶器」は「底本「すへき」。「酢坏」の誤写とも考えられる。」（新潮日本古典集成）とある。

この「かいふ」（「海賦」、「海部」、「匙」、「土器」）、「盃」、「陶器」（「酢坏」）といった大きさ、形態の描写は、現在イメージする「人魂」とは大きく異なる。それだけでなく、「おびたゝしく光りて、飛びあがり〳〵する」という描写も特異なものに思われる。

これについて「光り物の怪異は古今著聞集十七・変化第二十七などにも見える。」（新日本古典文学大系）とある。だが、『古今著聞集』の光り物の怪異と『とはずがたり』の「人魂」は本当に類似したものなのだろうか。以下でその光り物の怪異の概要を確認していくこととする。

水無瀬山中に古池があり、その池には人を捕まえて殺す変化のものがおり、多くの人が死んでいた。源右馬の允仲隆・薩摩の守仲俊・新右馬の助仲康の三兄弟は水鳥を捉えようとするが、ある人が池にいる変化のものの話をしてとどめる。しかし、ただ一人仲俊は実際に自分の目で確かめたわけでものないのに恐れとどまるのは意気地がないことだと考えて池に行く。池に到着し、弓矢をつがえて待っていると池の中が光ったが、その姿は確認できなかった。その光り物は松の上に飛びあがり、矢を放つとまた松へ飛び移る。何度もこれを繰り返し、射止めることは無理だと悟った仲俊は弓を置いて太刀を持って待つ。すると再び松に移り、仲俊のそばにやってきた。最初はただ光り物だと思っていたそれを見ると、老女が笑っている姿を現した。仲俊は太刀で切ろうと思ったが、その物はくみしやすいように思われたため、太刀を捨て、捕まえた。捉えられた物は仲俊を池に引き入れようとしたが、引き入れられない。しばらく互いに争って、仲俊は腰刀を抜いて差し通したところ、その物の力は弱まり光も消えた。それを見ると、狸であった。これを獲って仲俊は御所に行き、それを見た仲隆らは驚嘆する。（『古今著聞集』巻第十七、変化第二十七「薩摩守仲俊、水無瀬山中の古池にて変化を捕ふる事」[14]）

確かに、この光り物も木の上に飛びあがり、木から木に飛び移るという動きをしており「飛ぶ」という点では、類似しているといってよいかもしれない。だが、本当に『とはずがたり』の「人魂」と同類のものといっていいのだろうか。この場面では光り物（動物）が木に飛び移っているが、『とはずがたり』の「人魂」は十ほど連なって「飛びあがり飛びあがり」しており、動作も数も異なっており、『とはずがたり』の方がより特異な表現に思われる。

そもそも、この「飛びあがり飛びあがりする」とはどういう動作なのだろうか。この光って飛びあがり飛びあがりする描写については「とくに珍奇で珍しい描写」（全訳注

[15]）とされている。また、この「飛びあがり飛びあがりする」の訳は、「飛びあがり飛びあがりしている」（新編日本古典文学全集、全訳注）、「上下に飛ぶ」（新潮日本古典集成）となっている。それから、増田繁夫氏は「飛びあがったり下がったりして移動していった」、田中貴子氏は「飛びあがるような動作をしている」[16]としている。このように「飛びあがり飛びあがり」は新編日本古典文学全集や全訳注、田中氏の訳のようにほぼ本文に即した訳出がなされるか、あるいは、新潮日本古典集成や増田氏の訳のように上下に飛びながら移動するという訳出がなされるかのいずれかになっている。上下に飛びながら移動するという解釈は、極めて大きくうねるような動作をしながら空中を漂っているということを意味するのだろう。この「飛びあがり飛びあがり」という表現からは上下の動きの幅は大きく、機敏に動いているものと考えられ、うねるような動作というよりは跳ねるような動作と言った方がふさわしいかもしれない。また、空中を漂っているのではなく、地面について跳ねるような動作をしていたと解釈することも可能である。

ここまでみると、いずれの解釈をするにせよ、『とはずがたり』の「人魂」は、『古今著聞集』の光り物と異なるものだといえる。『古今著聞集』の場合は光る変化の物という不思議な存在ではある。しかしその正体は動物であり、動物が木の上に上がり、木から木へ飛び移っていることを指す記述である。一方、『とはずがたり』の「人魂」は「飛びあがり飛びあがり」しており、その特異な動作からは『古今著聞集』の光り物と同類のものであるとは考え難い。

この「飛びあがり飛びあがり」する「人魂」に関しては、上下に飛んでいる遊離魂と捉えるよりも、十ほどの流星が下から上へ流れる流星群と考えた方が妥当である。流星は上から下へ流れるイメージが強いが、流星は空の一点（放射点）から放射線状に流れているようにみえるので、みる位置によっては下から上に流れるようにみえることがある。「飛びあがり飛びあがりする」という語は「飛びあがり」という状態を反復していることになる。ここで、二つの解釈が可能となる。一つ目の解釈は、一つの個体が「飛びあがり飛びあがり」している状態、すなわち、大きくうねる状態、または、はねている状態を十個の「人魂」のそれぞれが行っているという解釈である。二つ目の解釈は、一つ目の個体が飛びあがり、二つ目、三つ目…、というように、一つの個体が飛びあがるという動作が十回繰り返されているのが「飛びあがり飛びあがりする」の意味であると考えられるのである。一つの個体が「飛びあがり飛

びあがりする」ためには、一回飛びあがったのちに次の飛びあがる動作をすることになるため、一度個体は下降する必要が生じる。だが、複数の場合、二回目以降の反復の動作を一つの個体が行う必要性がなくなるのである。二回目以降の動作は他の個体が行えばそれで反復となる。流星の一つ目が飛びあがり、二つ目、三つ目…、というように続き、十個の流星が下から上へと流れていっていると考えることができるのである。

次に、「人魂」が落ちるという表現がなされている記述をみていく。

ニ、右馬允有信云、去十日黄昏、人魂出自左府、落巽方山辺。其光極明、人多見之者、彼時男等四五人許、居庭中同見之、予亦見之、但不見出処、見落処、合有信所申、去八日早朝有異雲、所謂不祥雲云々（『小右記』長和元年四月十二日[17]）

ニの例では、「人魂出自左府、落巽方山辺」、すなわち藤原道長邸（左府）から出た人魂が巽の方角の山辺に落ちたとされている。これは『角川古語大辞典』の中で遊離魂を意味する「人魂」の用例として挙げられている。しかし、ここで気にかかるのは「落」ちるという表現である。「人魂」が「落」ちるというのは現在の認識からは説明がつかない。加えて、屋敷から出て山辺に落ちた、という表現も現在の認識とは異なっている。屋敷から出て、山辺に落ちるということはかなり大規模な移動をしていることになるが、現在「人魂」をイメージする際にそれほどの規模で移動をするとはあまり考えないだろう。

この「人魂」が「落」ちるという表現は、「流星」が上から下へ流れ落ちたと考えれば、容易に説明がつく。なお、「落」という表現は「流星」に対してもしばしば用いられている。

辛亥。辰時。有流星。落於東南。大可一尺。長可六尺。其色純白。（『三代実録』貞観十七年五月三十日[18]）

この他にも、「人魂」が「落」ちるとされている記述がいくつかみられるが[19]、これらも上から下に流れ落ちた流星をみて、「人魂」だと判断したものと考えられる。

こうした「飛びあがり飛びあがり」するという動作や「落」ちるという動作は、現在イメージする人魂と同様のものの動きと考えると不自然である。だが、実体は流星であるであると考えるとこうした動きをするのも納得がいく。そのため、こうした動作をする「人魂」は流星をみて

遊離魂だと判断したものとするのが妥当である。

今度は、断定はできないが、『更級日記』の「人魂」のように、その動きから流星とみることができる記述についてみていく。

ホ、与左少将朝任於西中門辺清談、佇立之間、人魂出自相府住屋上、指北去（『小右記』長和元年六月八日）

ヘ、於高倉辻顧西、自彼御所人魂出、指西山而去云々、曙後告此事、太奇恠、（『明月記』建暦元年十一月七日）

ホの例は「人魂相府より出て、北を指して去る」としていることから、かなり高い位置を飛んでいることがわかる。への例は、御所から出た「人魂」が西山の方角へ去ったということから、空を大きく駆け抜けるような移動の仕方をしている。

このように、方角が明記されている点、高い位置を飛んでいる点、大規模な移動をしている点をふまえると、流星をみて遊離魂と判断したと考えられるのである。また、このような記述は他にも確認できた[20]。

続いて、特に動きがなく、流星であると断定はできない記述についてみていく。

ト、昨夜光物在禁中、人魂之由聞云々、（下略）（『晴富宿祢記』文明十一年七月二〇日[21]）

トの例は「昨夜光物在禁中、人魂之由聞」ということしか書かれておらず、どういったものか知るには情報量が少ない。これは、流星かどうかはわからないが、光る物をみて「人魂」であると判断した記述といえる。このような記述は他にもみられる[22]。

それでは、流星でないことが明らかな記述についてみていく。

チ、其後又彼御内亀菊云御寵愛女房。彼部屋人魂サリニケリ。（『真俗雑記問答鈔』第十一[23]）

リ、天晴、辰後陰、午後甚雨、自坊門被告送云、夜前北壺呉竹辺有人魂飛云々、令卜筮丑申歳相当云々、多日病者之辺如此、更不及左右者也。二見女房云、其色白非丸、如折敷四方也、弘又如折敷、土と付天東〈行、依怖畏不能見、始終隠乾挟了、又今一人小女云、其色如火色赤云々、疑若非人魂歟（『明月記』正治二年三月五日）

チの例は、部屋から「人魂」が去ったとしているため、流星ではない。リの例に関しても、「北壺呉竹の辺りに人魂遊ぶ」とあり、低い位置を飛んでいることから流星でないという臼井氏の指摘がある。ただし、これは二人のみた「人魂」の姿がそれぞれ異なっており、また藤原定家が「人魂」ではないのではないかと判断しているのでやや例外的である。

このように、流星をみて遊離魂だと判断したとみられる記述は少なくない。

先ほど、多くの記述が流星をみて遊離魂だと判断したものである可能性について述べてきたが、「流星」と併記されているもの以外は流星だと断言することまではできない。そこで、「人魂」と「流星」との共通点をみることにより、流星を遊離魂とみることの妥当性について考える必要がある。そのため、「人魂」の大きさや形態、音、色について、「流星」と比較しながらみていくこととする。特に、「人魂」の形態に関しては、先述したように増田氏の指摘には再考すべき点があるため、より丁寧にみていきたい。

「人魂」の大きさ、形の比喩として、『とはずがたり』の例に「海部」、「盃」、「陶器」とあった。また、『御堂関白記』には以下に示すように、「大如唐臼」とある。これを「流星」の描かれ方と比較していきたい。

ヌ、丁卯、従丑寅、未申人魂渡、大如唐臼、（『御堂関白記』寛仁元年三月二十八日[24]）

ただし、『明月記』に「如折敷」とある[25]が、これは、「人魂」をみた二人の口述が異なっている上、定家が最後に、「人魂」ではないのではないか、と判断しているため、例外としてみる。

まずは、「流星」の大きさ、形態についてみていく。

丙午。夜有大流星。出自天中甲。指天中丙。行三丈没。以晷度推之。出自紫微宮。入天市垣中。体如大堝。色赤白有光。（『三代実録』仁和元年十一月二十六日）

『日本天文史料』を参照したところ、「流星」の大きさは、器状のもの、果物などに喩えられていた[26]。器状のものとしては右でみた「大堝」の他、「盆」[27]、「斗」[28]、「甕」[29]、「大土器」[30]、「飯銅」[31]等が確認できた。なお、「五石器」というものもあり[32]、どういったものかは確認

できないが、おそらくこれも器の類だったのであろう。その他「柚子」[33]、「柑子」[34]、「李」[35]、「月」[36]、「円座」[37]、「鞠」[38]、「車輪」[39]がみられる。それから、長さの比喩であるが「カラカサ」[40]もあった。特に器状のものを用いた例は多く、器の比喩は一般的なものであったことがわかる。

ここから考えると、増田氏が指摘した『御堂関白記』の「唐臼」も臼の部分が、中心がへこんだ器状の形であり、類似している。おそらく、これは臼の部分を流星、杵部分を流星の尾と捉えた比喩であろう。

また、先に挙げた研究書にみられるように、『とはずがたり』の「かいふ」が「匙」の誤写、あるいは「土器」の誤写であるとしたら、中心がへこんだ器状の形となっており、形態としては共通している。「匙」は「唐臼」と同様に柄の部分を流星の尾と捉えたものであろう。さらに、「盃」も同様に器である。「陶器」も諸注に「酢坏」である可能性が挙げられているが、これらはいずれも器であり、「流星」の形態の描かれ方と非常に類似しているのである。

なお、「形如」としているのではなく、多くが「大如」としていることにも留意する必要がある。大きさを喩える時も一般に形の似たものを用いるだろうが、単にその大きさを示した可能性も否定はできない。器での比喩は、形状が実際に器に似ていたというよりも、器が身近な道具であるため、その大きさを示すために用いられやすかったのかもしれない。しかし、もし単に身近な道具で大きさを喩えているだけであったにせよ、「流星」と描かれ方が似ていることはいえる。「人魂」は特異な形をしていたわけではなく、主に流星のような形として当時の人々は捉えていたといってよいだろう。

さて、「人魂」の「尾」についても確認していきたい。イの例「尾長五六尺許」、ハの例「尾は細長にて」、のように、「人魂」に「尾」があるとされ、その長さや細さについて言及がなされている。この「尾」について、「青白く光り、尾が細長いなどは、人魂についてよくいわれたり絵に見るとおりである。」（『とはずがたり』全訳注）とあり、尾は、現在における人魂と同じ特徴として考えられてきた。だが、これを「流星」の尾として捉えることもできるのではないだろうか。

「流星」に「尾」があるとする表現は古くからみられる。

壬戌。夜流星。長可二丈。余光照赤。四断散堕宮中。（『続日本紀』神亀五年九月[41]）

戊子、酉時流星入参南辺、其色青白、体大尾短、欲入之時、分迸連入、（『三代実録』貞観十五年十一月廿七

日）

これをふまえると、イ、ハの例の「人魂」は流星を遊離魂とみなした記述と考えた方が妥当だといえるのではないだろうか。

また、「人魂」が出現する際に、音が鳴っていることに着目したい。イの例「其声如雷落乎」、ハの例「大風の吹く折に荒き磯に波の立つやうなる音」とある。

まず、「雷」のような音についてだが、これは衝撃波音であろう。「遂殞于地」とあることから隕石を指すものと考えられる。流星の音には二種類あるとされ、一つがこの、隕石のように規模の大きいものによる衝撃波音である。

次に、『とはずがたり』に関してだが、「とくに珍奇で珍しい描写」の一つである（全訳注）という見方がなされてきた。確かにこの「人魂」を現在の遊離魂と同じものと考えると、このような音が鳴るのは不自然である。こちらも、流星の音だと考えることで説明がつく。

甲辰。亥時有大流星。出自氐南。入軫翼間。其尾二許丈。色赤有光。衆星随行。所過之処。木葉作声。（『三代実録』元慶二年五月九日）

この、「木葉作声」と「大風の吹く折に荒き磯に波の立つやうなる音」は同じものなのではないかと推測できる。科学的には説明が完全になされているわけではないが、流星の音には衝撃波音の他に、電磁波音があるとされている[12]。この音は電磁波音を指すものであると考えられるのである。

時に、「人魂」の色はどんな色だったのだろうか。

色に関する記述は数少ないが、「左青有」（『万葉集』）、ハの例「青めに白き」といった記述から、青もしくは青白として認識されていたことがわかる。

それから、先述したリの例の「人魂」かどうかが不明確な記述についてだが「二見女房云、其色白非丸（中略）又今一人小女云、其色如火色赤云々」とあることから、白と火のような赤も「人魂」の色として想定されていたといえる。

現在でも流星には様々な色のものがあるが、文献にもその色が記録されている。

「光青赤」（『文徳実録』天安二年六月）、「其色赤白」、「青而有光」（『三代実録』貞観十三年閏八月二十九日）、「其色青白」（『三代実録』貞観十五年十一月二十七日）、「色赤」（『三代実録』貞観十六年三月一日）、「其色黄白」

（『三代実録』貞観十六年六月二十九日）、「其色純白」（『三代実録』貞観十七年五月三十日）といったように、「赤」、「青」、「黄」、「白」やそれぞれを組み合わせた「赤白」や「青白」といった色のものがあったことが確認できる。

このように、「人魂」の色は、「流星」の色と同じ色が含まれており、色の面では流星とみても問題ないだろう。

ここまでで大きさや形態、尾、音、色に関して「流星」と「人魂」を比較したところ、「流星」と「人魂」の描かれ方は非常に類似しているということが明白になった。ここから、「流星」であると明記されていない「人魂」や、これまで現在イメージする遊離魂と同様のものとして捉えられてきた「人魂」は、実際には流星を見て遊離魂だと判断したものが少なくないことがみえてきた。

四、人の死と結び付けられた「人魂」

流星をみて「人魂」であると判断されることが多くあったようだが、全ての流星が「人魂」と判断されたわけではない。増田氏も以下の例を挙げ、流星が「人魂」に似ているとしていることから、「流星はどんなものでも人魂とされたわけではなく、やはり人々が人魂と認める一定の形態があったのであろう。」としている。

戌刻許流星飛行、其体似人魂、而洛中家々所々□□□□（ママ）云々、匪直也、可恐々々（『民経記』寛喜三年六月十五日[13]）

ここで、浮上するのが「流星」と判断される場合と「人魂」であると判断される場合に何か違いがあったのだろうかという問題である。これについては三つほど考えられる。

第一に、人の死が予測されるような状況下でみた流星が、遊離魂であると判断されやすかったのではないかということが考えられる。増田氏は、「人魂は突然に現れるわけではなく、既にそれ以前から人々の心中には、人魂が現れるかもしれないという予感をもたらすような文脈があり、実際に人魂や不祥雲などを見る以前から、人々は既にそれらを探してもいたのである」としている。そして、その例として、病悩の続いた時期や道長と二条天皇の不仲など政権の不安定な時期などを挙げている。ただし、政権の不安定な時期というのは、確かに心理的に不安定だったかもしれないが人の死とは関係ないため、「人魂」出現と結び付ける根拠としてはやや弱いといえるだろう。

『日葡辞書』でも説明されているように、「人魂」は人の死の前兆として出現している。先に挙げた二つの女流日記

『更級日記』、『とはずがたり』では、人の死の前に「人魂」が出現している。『更級日記』では、「人魂」をみた直後には「供の人」の魂だろうかと考えるが、後には作者の夫橘俊通の魂だったのだとする。一方、『とはずがたり』では後嵯峨法皇の崩御の前兆として「人魂」が現れたとされている。ここで、この「人魂」が出現している時点では、橘俊通は亡くなっておらず、後嵯峨法皇もまた崩御していないことに留意する必要がある。また、『とはずがたり』の「人魂」出現の後には「今宵よりやがて招魂の御祭、泰山府君など祭らる」とあり、「招魂祭」という儀式が行われていたことが確認できる。この儀式は「人魂」が登場する記述に度々登場している。この招魂祭は延命や病気平癒のため、生前に離れた魂を呼び寄せるものであった[14]。当時は光る物をみて、人の死の前兆としての遊離魂であると判断し、場合によっては招魂祭などを行うというのが一連の流れだったのだろう。

このことをふまえて考えると、やはり、病悩が続いている時など、特に人の死が予想される時期に「人魂」であると判断されたのだろう。

第二に、人の住む建物から出ている流星が、人の死と関連付けられ、「人魂」とされたのではないかということが考えられる。例えば、「人魂出自相府上」（『小右記』長和元年六月八日）のように、「人魂」と記述される場合には建物に対して出入りしていることが明記されていることが少なくない[15]。一方、「流星」と記述される場合、出入した方角は書かれているものの、建物から出た、建物の方に落ちた、という記述はほとんどみられない[16]。これはおそらく、人の住む建物から出ているようにみえる流星だからこそ、人の死と関連付けられたのではないだろうか。特に『権記』寛弘八年七月九日「人魂二落御竈殿中」について、御竈殿は魂結びに関係する場所だったことを増田氏は指摘し、「夜。偸児神祇官西院斎戸神殿。盗取三所斎戸衣。并主上結御魂緒等」（『三代実録』貞観二年八月二十七日）の例を挙げる。「魂結び」というのは魂が離れていくのを止める呪術で、衣服の下の一部を結ぶものであった[17]。こうした、人の魂と密接に関係する場所に落ちたことも「人魂」であると判断する一つの材料となったといえるだろう。

五、おわりに

本稿の第一章では、まず当時の「人魂」の語義について確認し、遊離魂の意味、流星の意味の二つがあり、実際に「人魂」と「流星」の関係性が強いことをみた。

第二章では先行研究として増田氏の光る物全般に魂をみ

る認識があったという指摘、臼井氏の『更級日記』における「人魂」が流星だったのではないかという指摘について紹介した。

第三章では、当時の文献の中で、流星をみて人から遊離した魂ではないかとみた例がどのくらいあるのかについて、動き方の面から検討したところ、流星をみて「人魂」であると判断した記述は少なくなかった。さらに、「人魂」の大きさや形態の比喩、音、色について、「流星」の描かれ方と比較してみると、「流星」と「人魂」の描かれ方は非常に類似していることが明らかになった。このことから、動き方の面からのみでは流星を遊離魂とみたものか判定に迷う記述の多くも、やはり流星をみて「人魂」と呼んだものと考えられることをみてきた。

第四章では、「流星」と判断される場合と「人魂」と判断される場合の違いについてみてきた。その違いは、流星出現の時期や場所、出現頻度などに特徴があり、人の死が想起される条件によるものだと考えられる。

それでは、ここまで述べてきたことから、当時の「人魂」がどういったものだったのか改めて総括していきたい。『角川古語大辞典』や『日本国語大辞典』によると、①人から遊離した魂、②流星の俗称の二つの意味があるとされていた。辞書の性質上、このような形で記さざるを得ないのだが、これらの意味は二つに分けるべきではない。現在と異なり、当時は光る物全般に対して魂を見る認識が存在していた。そのため、光る物をみた時、その中でも特に流星をを見た時に、遊離魂であると判断し、「人魂」と呼ぶことが多かったといえるだろう。ただし、流星がすべて「人魂」であると判断されたわけではない。この「人魂」は人の死の前兆として出現するものであったため、特に人の死が連想されやすい条件下で、光る物（多くは流星）を見た際に、より「人魂」であると判断されやすかったのだろう。

注

1　本稿では、文献から引用する場合及び古代、中世特有の人魂を「人魂」と表記し、現在イメージする人魂には、カギ括弧を付けずにそのまま人魂と表記する。ただし、引用する場合はその引用元の表記に従った。

2　古代、中世の文献の中で登場する流星を「流星」と表記し、純粋な天文現象の流星にはカギ括弧を付けずにそのまま流星と表記する。なお、③は近世における意味である。

3　黒板勝美、国史大系編修会編『日本紀略後篇・百錬抄』（新訂増補国史大系十一）、吉川弘文館、一九六五年。以下に記す『百錬抄』の例は全てこれを参照したものである。

4　『扶桑略記』延長八年七月十五日裏書、『山槐記』永暦元年七月十五日の記事に「人魂」と「流星」とが併記されている例がみられる。『御堂関白記』寛仁元年三月二十八日の例は「人魂」と「流星」は併記されていないが、『角川古語大辞典』の中で流星の俗称の意の用例として掲げられている。これは「人魂」が「渡」るという表現がなされているため流星と見られたと考えられる。「渡る」という語には「日や月が空を移動していく」（『日本国語大辞典』第二版）という意味があり、天文現象に関する語として用いられることがあった。「流星」に関しても、この例のように「渡」という表現を用いている記述が『百錬抄』治承四年十月七日の記事にみられる。

5　亀井孝解題『日葡辞書』勉誠社、土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳　日葡辞書』、岩波書店、一九八〇年。

6　『御堂関白記』寛仁元年三月二十八日の例。後述する本稿のヌにその本文は記している。

7　臼井正「星のしるしと晴明桔梗　捕逸:『更級日記の人魂』」（京都の天文学【六】）△http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/hosizora/astron/astron6/astron6_P15-19.pdf▽二〇一五年六月三〇日二〇時取得。以下に記す臼井氏の論は全てこれによるものである。

8　長谷川政春、今西祐一郎、伊藤博、吉岡曠校注『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』（新日本古典文学大系二四）、岩波書店、一九八九年。

9　鈴木知太郎、川口久雄、遠藤嘉基、西下經一校注『土佐・かげろふ・紫式部・更級』（日本古典文学大系二〇）、岩波書店、一九五七年。

10　秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成三九）、新潮社、一九八〇年。この『万葉集』巻十六、三八八九番の歌が「人魂」という語が確認できる最古の例である。以下に記す『万葉集』の例はこれと同じものである。原文は万葉仮名で表記されている。

11　三角洋一校注『とはずがたり　たまきはる』（新日本古典文学大系五〇）、岩波書店、一九九四年。以下に示す『とはずがたり』の新日本古典文学大系は全てこれを参照したものである。なお、「人魂」に関する引用文には便宜上、記号を付したが、「流星」に関する引用文には付さなかった。

12　福田秀一校注『とはずがたり』（新潮日本古典集成二〇）、新潮社、一九七八年。以下に示す『とはずがたり』の新潮日本古典集成は全てこれを参照したものである。

13　久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集　とはずがたり』（新編日本古典文学全集四七）、小学館、一九九九年。

14　永積安明、島田勇雄校注『古今著聞集』（日本古典文学大系八四）、岩波書店、一九六六年。以下に記す『古今著聞集』の例は全てこれを参照したものである。

15　次田香澄著『とはずがたり上全訳注』、講談社、一九八七年。以下に記す『とはずがたり』の全訳注は全てこれを参照したものである。

16　田中貴子著『あやかし考――不思議の中世へ』、平凡社、二〇〇四年。

17　増補「史料大成」刊行会編『小右記』（増補史料大成）、臨川書店、一九六八年。以下に記す『小右記』の例は全てこれを参

照したものである。

18 黒板勝美編、国史大系編修会編『日本三代実録』（新訂増補国史大系四）、吉川弘文館、一九六六年。以下に記す『三代実録』の例も全てこれを参照したものである。

19 『権記』寛弘八年七月九日、『山槐記』保元三年九月二十三日の記事にみられる。

20 『扶桑略記』延喜十年九月五日裏書、『扶桑略記』延長元年五月二十日裏書、『中右記』大治四年十月九日、『台記』天養元年五月二十六日の記事にみられる。

21 壬生晴富『晴富宿祢記』（図書寮叢刊）、宮内庁書陵部、一九七一年。

22 『中右記』嘉保二年十月二日裏書、『明月記』建永元年六月二十七日、『明月記』承元元年四月二十二日にみられる。ただし、これらの記述にはそれぞれ、「是人魂之疑」、「泰忠申云非人魂、業弘申云人魂也」、「人魂疑歟」と記されており、「人魂」であると断定されていない。「人魂」とされるにはある一定の基準があったのだろう。

23 続真言宗全書刊行会校訂『真言宗全書』、同朋舎、一九七七年。『真俗雑記問答抄』は中性院頼瑜の撰述で事相教相に関わる諸事項をはじめとして、伝受の聞書、諸寺院の記録、和歌、歌会次第の作法、漢詩、夢想等、種々雑多な事項が網羅的に記されており、百科事典的性格を有する（粕谷隆宣・高橋秀城「内閣文庫蔵『真俗雑記抄』（乾）翻刻」『仏教文化学会紀要』第十三号、二〇〇四年）。

24 東京大学資料編纂所編『御堂関白記』、岩波書店、一九七七年。

25 増田氏はこの、方形のものに「人魂」を見ることにて、鎮魂祭の際に用いる「はこ」と関連するものなのではないかと考えている。

26 『古事類苑』に見られる「流星」の大きさの比喩は全て『日本天文史料』に含まれていた。本稿では、便宜上、「流星」という語が用いられているもののみの比喩を確認し、「星」が「隕」ちるなどという際の比喩は含んでいない。なお、同日同時刻に出現した「流星」について同じ比喩で説明したものが複数ある場合には一例として数えた。

27 『続日本紀』宝亀七年二月六日の記事にみられる。

28 『文徳実録』仁寿元年正月三十日の記事にみられる。

29 『本朝世紀』久安六年七月十二日の記事にみられる。

30 『百錬抄』治承四年十月七日の記事にみられる。

31 『満済准后日記』永享六年九月二十三日の項の同年九月十一日の記事にみられる。

32 『続史愚抄』寛正六年九月十三日の記事にみられる。

33 『三代実録』貞観十三年閏八月廿九日の記事にみられる。

34 『中右記』康和五年十月十日の項の同年十月一日の「流星」の記事にみられる。

35 『三代実録』貞観十六年三月一日の記事にみられる。

36 『文徳実録』天安二年六月の記事にみられる。

37 『吾妻鏡』宝治元年三月十二日の記事にみられる。

38 『満済准后日記』永享六年十月十五日の項の同年九月十一日の記事にみられる。

39 『後法成寺関白記』永正十七年六月二日の項の同年六月二十五

日の記事にみられる。

40 『後法興院政家記』明応七年八月二十六日の記事にみられる。

41 黒板勝美、国史大系編修会編『続日本紀』（新訂増補国史大系二）、吉川弘文館、一九六六年。以下に記す『続日本紀』の例も全てこれを参照したものである。

42 流星物理セミナー（MSS）資料集「電磁波火球」、「電磁波現象」の項。二〇一六年七月版のPDFを参照した。<http://msswg.net>二〇一六年十二月二十七日取得。

43 東京大学史料編纂所編『民経記　三』、岩波書店、一九八一年。

44 斎藤英喜著「「招魂祭」をめぐる言説と儀礼―陰陽道祭祀研究のために―」（『鷹陵史学』所収）、鷹陵史学会、二〇一一年。

45 『小右記』長和元年四月十二日、『中右記』嘉保二年十月二日裏書、『晴富宿祢記』文明十一年七月二〇日、『権記』寛弘八年七月九日、『小右記』長和元年六月八日、『明月記』建暦元年十一月七日の六例も建物の近くを飛ぶ、あるいは建物に対して出入りしている記述である。

46 流星が建物に落ちるという記述は、『古事類苑』、『日本天文史料』の中で以下に示す一例のみ確認できた。ただし、これは星が落ちたという記述であり、「流星」という語は用いられていない。

壬子。（中略）是夜有星。落于押勝臥屋之上。其大如甕。（『続日本紀』天平宝字八年九月十八日）

47 陰陽道により行われる招魂祭の中にも「魂結び」が取り入れられており、招魂祭と切り離して考えることはできない。